

# 「4技能 + $\alpha$ 」総合的外国語運用能力の育成を目指して

—山口県立大学国際文化学部における言語教育の取り組みについて—

林 炫情<sup>1)</sup>・森原 彩<sup>2)</sup>

## 1. はじめに

山口県立大学国際文化学部では、山口県立大学の教育理念である「個性豊かな地域文化の進展に資する教授研究」に対応し、国際的な視点に立ち、「文化の交流・創造・発信」のできる能力や、国際教養能力、地域の国際化を推進する能力、個性豊かな自己文化の発掘と創造能力の育成を教育目標としている（学部ホームページ <http://www.yamaguchi-pu.ac.jp/gakubu/ic/rinen.html>）。また、平成24年度からは、文部科学省が推進する「グローバル人材育成推進事業タイプB（特色型）」に採択され、教育内容の更なる拡充を図っているところである。

「グローバル人材育成推進事業」とは、若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るための体制整備として、文部科学省が平成24年度より推進している事業である。国際化拠点整備事業（通称グローバル30）が海外からの留学生を受け入れる体制整備を目的としたのに対し、本グローバル人材育成推進事業（通称グローバル30プラス）は内向き志向が課題視され、海外に設けられた研究拠頭に国内の学生を派遣し、世界で通用する力を備えた人材を育てることを目的としているといえる。本学が採択されたタイプB（特色型）に対しては、全国の国公立大学等から111件の申請があり、31件が採択されている（公立大学では、本学を含めて3校のみ）。

本事業における本学のグローバル人材育成構想は、『元気な地域は元気な国の基となり、地域のグローバル化は元気な地域を作るカギとなる』という考えに基づき、学部の8割の学生を在学中に海外へ派遣し、世界と日本の地域をつなげ

て課題解決に向かう姿勢と地域の歴史的、文化的、自然的、人間的な資源の価値や可能性に着目し、世界に「売り込める」力を有する Inter-local 人材育成を目標としている。本構想で掲げる「Inter-local」には、従来の文化の根幹を超えるという意味の「Inter-cultural 人材」に、世界のさまざまなエリアと直接つながる力（Inter-regional）を加えている。また、「I」には ICT（Information and Communication Technology）を使える力、自発的な学びや自学自習を進める力（Initiative and Independence）、自己を確立する力（Identity）、柔軟でオープンなアイデアを生み出す力（Idea）を育成するという意味を込めている。そして、「Local」は本学が掲げている「地域貢献型大学」や本学の教育理念及び教育目的に取り上げている「地域」を示している。

Inter-local 人材育成実現のための具体的な取り組みとして、国際文化学部の既存のカリキュラムに加え、①「域学共創学習プログラム」の展開、②「4技能 +  $\alpha$ 」総合的外国語運用能力の育成、③ IPD ポイント制度の導入、④「域学連携コンソーシアム」の設立の4つを掲げている。本稿では、上記の4つの取り組みのうち、②「4技能 +  $\alpha$ 」総合的外国語能力の育成を取り上げ、その取り組みの進捗状況について報告する。

## 2. 山口県立大学国際文化学部における言語教育の取り組み

本取り組みでは、グローバル人材に求められる語学力を、学術的思考力と表現力を身につけた総合的な言語運用能力と定めている。大学卒業者に相応しい語学力を身につけさせるだけでなく、これからの就職や留学に必要な総合的な言語運用能力育成とその評価システムを確立す

ることを目指している。

## 2.1 言語能力スタンダードの体系化とカリキュラムの改善

国際文化学部では、所属する学科や系・コースにより卒業時の到達目標を設定している。学部生は、2年生から系・コースを選択し、履修モデルに沿った専門性を伸ばしながら、設定された言語能力スタンダードを指標に学習を進める。言語能力スタンダードとして、国際文化学科の言語コミュニケーション系は、TOEIC700点以上、または中国語検定試験2級、ハングル能力検定試験準2級、スペイン語技能検定試験3級以上を、国際文化系はTOEIC600点以上、または中国語検定試験3級、ハングル能力検定試験3級、スペイン語技能検定試験3級以上を目指すことになっている。また、文化創造学科はTOEIC550点以上、またはスペイン語技能検定試験3級以上を目標としている。

平成24年度は、言語教育の一貫性と透明性を確保するための言語教育スタンダードの体系化に重点をおき、各言語（英語、中国語、韓国語）の「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能別にI～IVとして開講している現行カリキュラムを見直すとともに、各言語のカリキュラムマップの整備を行った。言語科目間の連携・体系化を明確化した学習到達目標は、CEFR（言語のためのヨーロッパ共通参照枠：学習、教育、評価（Common European Framework of Reference for Languages; Learning, Teaching, Assessment））をひな形に、本学部の言語教育理念を踏まえ、本学独自の総合的な言語運用能力を盛り込んだ「Can-Doリスト」を新たに設定した。この学習到達目標は、平成25年度のシラバスより反映されている。表1は韓国語における言語能力別カリキュラムマップ、表2は英語の授業例である。

表1. 韓国語における言語能力別カリキュラムマップ

開講時期 (目安)	授業科目	言語領域(4スキル)					言語レベル (CEFR)	検定試験レベル (目安)		
		基礎・全般	話す	聞く	読む	書く		ハングル 能力検定 試験	韓国語 能力 試験 (TOPIK)	
1年	前期 韓国語 I	◎					導入(入門)	A0	-	-
	後期 韓国語 II	◎					基礎段階の 言語使用者 (初級)	A1	5級	1級
2年	前期	実践韓国語 I		◎				A2.1	4級	2級
		韓国語リスニング I			◎					
		韓国語講読 I				◎				
	後期	実践韓国語 II		◎				A2.2	3級	3級
		韓国語リスニング II			◎					
		韓国語講読 II				◎				
3年	前期	実践韓国語 III		◎			自立した言 語使用者 (中級)	B1	準2級	4級
		韓国語リスニング III			◎					
		韓国語講読 III				◎				
		韓国語作文 I				◎				
	後期	実践韓国語 IV		◎				B2		
		韓国語リスニング IV			◎					
		韓国語講読 IV				◎				
		韓国語作文 II				◎				
※「インターカルチュラル・スタ ディーズ韓国語」(平成28年度よ り新設を検討)		総合的外国語運用能力 (課題遂行異文化相互理解授業)					熟達した言 語使用者 (上級)	C1	2級	5級
								C2	1級	6級

◎：授業で主として重点をおくスキルを示す。

表2. 英語の授業例

授業科目	ディベートⅡ
言語レベルとスキル	中級 × 話す
学習目標	様々な視点から問題を見ることができる。 批判的思考により自分の考えを検証することができる。 明確かつ簡潔に自分の意見を述べるることができる。
授業形態	オープンディスカッションとロール・プレイを取り入れた実践的な授業。
授業の概要	授業では、国内外の諸問題について、調査をもとに考えや意見をまとめ、ディベートを行う。また、肯定側と否定側に分かれの立論や質疑応答は、英語で進める。

また、現在進行中の新カリキュラム検討においては、平成28年度より英語で開講する科目の増設、そして上級レベルの学習者及び留学から帰国した学生向けの、総合的外国語運用能力、つまり「話す、聞く、書く、読む」の4技能に、異文化理解と自己のアイデンティティ意識を含んだコミュニケーション力としての異文化コミュニケーション力を育成する「インターカルチュラル・スタディーズ英語」、「インターカルチュラル・スタディーズ中国語」、「インターカルチュラル・スタディーズ韓国語」の新設が具体化されている。

さらに、外国語教育の効率化を図るための習熟度別のクラス編成の実施、外国語関連科目の少人数化の検討も本格化している。習熟度別のクラス編成の実施では、既に入学時プレースメントテストにより、習熟度別クラスを設けている英語に続き、平成25年度より中国語、韓国語でも、初級の履修者に対して1年生前期終了時にプレースメントテスト（学期末テスト）を実施し、後期から習熟度別クラスを試行的に運用している。また、少人数ゼミでは、できるだけ学習言語を使って教えることで、学生が目標言語を使って自分の意見を発信できやすい教室環境改善に務めている。

## 2.2 外部テストの活用とその結果を成績評価の一部として採用

本学部では以前より学生の語学力の伸びを客観的基準に基づいて把握し、今後の本学の授業改善により効果的に活用するため、外部テストの受験を強く推奨しており、毎年学内で試験を実

施してきた（TOEICが年3回、中国語が年3回、韓国語が年2回）。外部テストは、就職や留学をにらんだ長期的・持続的な学習意欲の動機付けにもつながることが期待できる。そこで、将来的には本学部のすべての学生に対する外部試験の義務化も視野に入れ、外部テストの結果を、IPD（Initial Professional Development：IPDは生涯にわたるキャリアの入り口に立つという意味）ポイントに反映したり、単位認定や成績評価の一部として採用するなどの仕組みを積極的に検討し、学生の学習意欲を高めようとしている。今後、「マイ言語管理システム（ICTを活用し、各自選択した一つの言語の4年間の学習過程を管理するシステム）」の導入により、卒業時の言語能力スタンダードを指標とし、学生自らが入学から卒業までの言語学習の目標を設定し、目標達成度や学習状況を把握できることから、学生の計画的な語学学習のさらなる支援が期待できる。

## 3. ICTを活用した授業と自律学習の環境整備

学生の継続的な語学学習や発信型語学力の向上を促すためには、正課授業と正課外授業が連携した教学の環境整備が必要である。「グローバル人材育成推進事業」の取組開始とともに、マルチメディア機材を備えたActive Learning Language Lab（Computer-Assisted Language Learning：CALL教室、通称LaLabo）を新設した。また、新設したCALL教室にはチエル社の『CaLabo EX』を導入し、マルチメディア機器

などを活用したアクティブラーニング型語学授業や双方向型授業が展開できる外国語学習環境を充実させた。システム導入の際には、「簡単操作」、「画面や音声のモニタリング」、「会話機能とグループワークなどに関する機能の充実度」、「簡単なテスト問題作成の対応」、「多言語の対応」を最重視した結果、『CaLabo EX』を選定した。外国語授業におけるCALLシステム（言語学習システム）は、平成24年4月より本格的利用が始まり、語学担当教員間でFDを重ねながら授業改善に取り組んでいる。

### 3.1 LaLabo (CALL 教室)

LaLaboは、現在30台の学生用コンピュータを有するCALLシステムを整備している。各コンピュータには、ヘッドセットとマイクがついており、英語・中国語・韓国語の授業に活用できるほか、自主学習教室としても開放し、学生の自立的な学習をサポートしている。(図1参照)

とりわけ、CALLシステムを取り入れた授業では、eラーニング教材を用いた自主学習、ディクテーション（聞き取り）、発音練習、シャドー



図1. LaLabo 教室での授業の様子

イング練習などの語学強化学習、言語学習用の動画や音声の視聴など、それぞれの授業の目的に合わせた実践的言語学習やアクティブかつインタラクティブな学習スタイルが展開されている。また、平日の放課後18時から20時の2時間、土曜日の9時から17時までの開室時間には、学生サポーターがCALL教室に在室し、自主学習を行っている学生の支援を行っている（学生サポーターについては3.3で述べる）。

外国語教育場でのCALL活用について、前期の学生アンケート及び教員間の意見交換会では、オンラインテストやモニターによってライティングやメモなどの情報を学生同士で共有できること、ペア会話やグループ会話によって普段話をしない人と話ができることを、教員、学生ともに高く評価していることが分かった。その一方で、学生からは「CALLの操作方法が分かりづらい」「先生との対話が少なくなった気がする」との意見もあることから、引き続き改善策を模索していきたい。

### 3.2 学生主体の授業支援とLMS

(Learning Management System) の整備

学生主体の授業、語学検定試験などの情報発信、学生の自習学習のさらなる充実をはかるために、上述したCALLシステムと併用して、授業進行をサポートするコース管理システム『CaLabo Bridge(通称LaLabo多言語広場)』(LMS)を導入した(図2)。「CaLabo Bridge」では、授業内容の管理から、授業で使用する教材や資料の提示、学生の学習状況の確認・管理が容易である。

一方、語学検定対策や語彙学習ができるeラーニング教材を自宅での学習にも利用できるよう、eラーニング教材配信システムの整備もあわせて行った。2013年11月現在、『CaLabo Bridge(LaLabo多言語広場)』で提供しているeラーニング教材は図3のとおりである。なお、学生には、平成25年度後期オリエンテーションや授業を通して『CaLabo Bridge(LaLabo多言語広場)』利用を周知し、授業管理を含む言語全体のお知らせ、教室変更の連絡、検定情報、学習会、イベント・行事案内などをすべて『CaLabo Bridge(LaLabo多言語広場)』から告示している。今後、本学部の外国語カリキュラムの補充、検定試験支援を目的としたeラーニング教材の拡充を図っていく予定である。

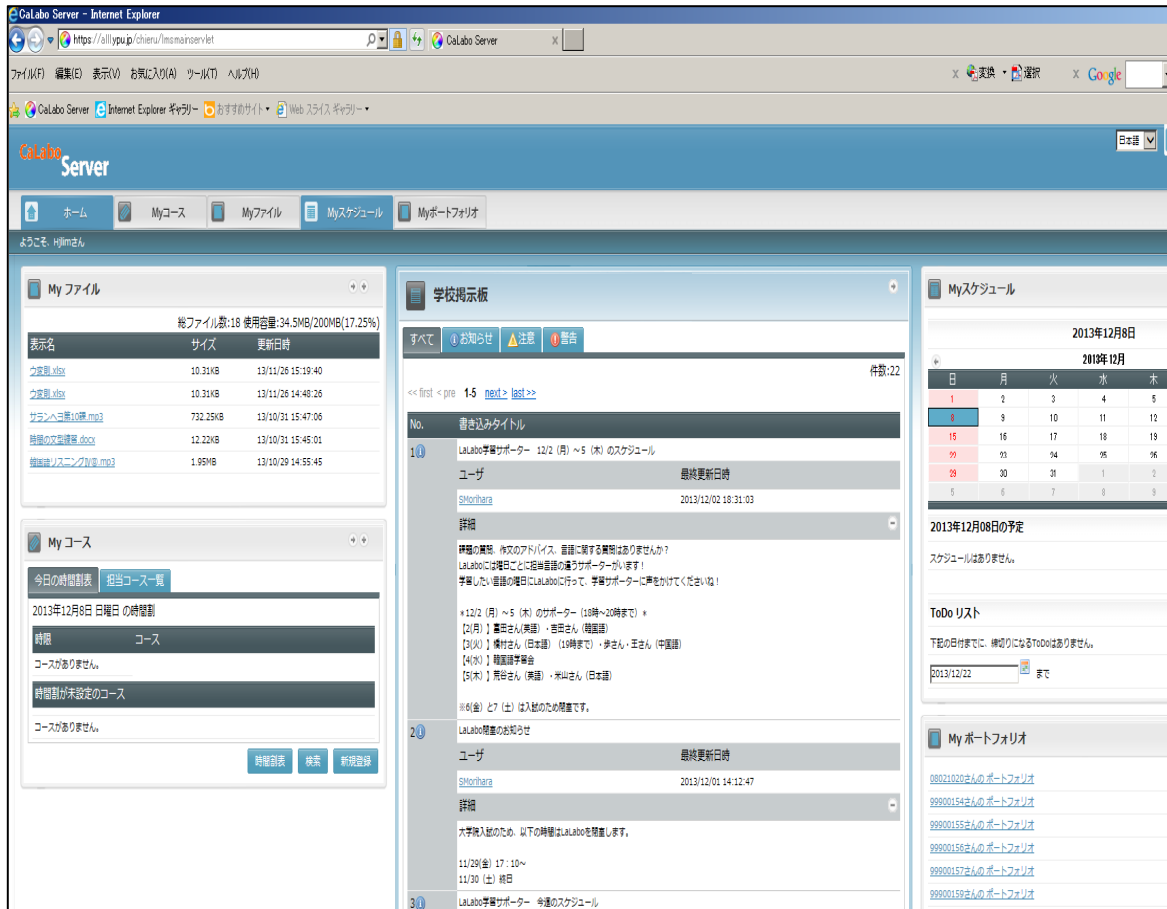


図 2. 『CaLabo Bridge (LaLabo 多言語広場)』画面

e-learning教材リスト		*ムービーテレコ 映像は学内のみ利用可能 (音声は持ち帰り可)	
	番号	タイトル	場所
英語	1	Homestay Adventures	ムービーテレコ 購入
	2	Campus Encounters	ムービーテレコ 購入
	3	映画教材・シャドーウィング教材	*ムービーテレコ 本学作成
	4	TOEIC Part5練習問題	CaLaboサーバ 本学作成
	5	単語教材(語源から学ぶ英単語)	CaLaboサーバ 本学作成
韓国語	1	ゼロからカンタン韓国語	CaLaboサーバ 購入
	2	初・中級のためのイラストで解く 韓国語リスニング	CaLaboサーバ 本学作成
	3	第36回ハングル検定過去問題 5級～準2級	CaLaboサーバ 購入
	4	第37回ハングル検定過去問題 5級～準2級	CaLaboサーバ 購入
	5	第38回ハングル検定過去問題 5級～準2級(準備中)	CaLaboサーバ 購入
	6	第39回ハングル検定過去問題 5級～準2級(準備中)	CaLaboサーバ 購入
中国語	1	ゼロからカンタン中国語	CaLaboサーバ 購入
	2	語彙教材(準備中)	CaLaboサーバ 本学作成
	3	中国語視覚教材	ムービーテレコ 購入
	4	中国語検定 過去問題	web site 購入
日本語	1	日本語能力検定試験N1 漢字1000	CaLaboサーバ 購入
	2	日本語能力検定試験N1 単語2000	CaLaboサーバ 購入

図 3. e-ラーニング教材リスト (2013年11月末現在)

### 3.3 学習サポーター体制

CALL 教室 (LaLabo) 設置にあわせ、言語学習のアドバイス及びCALL システムやe-ラーニングの基本的な使い方などをサポートする学習サポーター制度を、平成25年度5月より導入した。学習サポーターは、留学経験者及び留学希望者の学部3、4年生、大学院生、留学生を対象にしており、学期ごとに募集、選考を行っている。現在、13名の学生が活動を行っている(担当言語別の内訳は、英語が4名、中国語が3名、韓国語が4名、日本語が2名)。

学習サポーターの主な役割は、以下の3つである。まず、①個々の発音練習など、教員が授業内でサポートしきれない部分をサポートすることで、教員と学生を結ぶかけはしになること、②学習仲間・学習コミュニティを作ること、③学生の身近なロールモデルになることである。②は言語学習や検定学習は単語を覚えるなど、どうしても一人の学習になってしまいがちであるが、学習仲間や学習コミュニティーを作ること「一人で学習しているのではない」と励まされ、学習意欲を高めることができる。③は、あまりに遠く手の届かない目標を定めてしまうと目標を見失いがちになってしまう可能性があるが、「少し頑張れば手が届きそう」という近い目標を定めることで、学習への取組みが積極的になることが期待できる。こうした学習サポーターの存在は、学生の学習意欲を高めてくれるだけでなく、学習サポーター自身も、さらなるレベルアップを図るため、学習意欲が増し、授業への取組みがさらに積極的になっているなど、相乗効果が得られている。

学習サポーターにおける学習会の運営は言語ごとに自習ゼミ形式で行っている。活動の内容は、まず韓国語学習会では毎週水曜日18時から20時までLaLabo 教室にて学習会を開催しており、参加学生のニーズや時期によってその内容を変化させている。例えば、6月と10月の年2回実施されるハングル能力検定試験や10月に実施される韓国語検定試験の前には過去問題を用いたり、検定問題に出題されやすい単語学習をしたりと、検定に向けた学習を行う。そして検定後は、発音や会話練習、韓国語のポップ音楽を活用しながら新単語やフレーズの練習を行う

など、学生自身が楽しみながら学習できる内容となっている。次に中国語学習会では、毎週木曜日の4限目(14時30分から16時)に開催され、「家族」「学校生活」「休日の過ごし方」など身近なトピックについて質問しあう会話練習や単語カードにて発音練習をしている。最後に英語学習会では、毎週水曜日に異なる形態の2つの学習会を行っている。ひとつは「English Lunch」という学習会で、昼休みに食堂で、英語圏からの交換留学生と共にランチを食べながら会話を楽しむというコンセプトで実施している。もうひとつは同じく水曜日の5限目(16時10分から17時30分)にLaLabo 教室にて映画を見ながら英語に親しむという学習会である。2週間に1本の映画を鑑賞し、文化に触れたり、新しい単語やフレーズなどを練習したりしており、英語に苦手意識を持っていた学生にも好評である。

今後の課題としては、学習会への参加人数を拡大と学習会と学習サポーターの質を向上させることが挙げられる。学習会への参加人数を拡大するために、参加学生の対象ターゲットを明確にし、レベルや目的で分けていきながら、学習会の日時をもう一度検討し、対象ターゲットの学生が集まりやすい時間帯を設定するよう調整を行う予定である。また、学習サポーターの質の向上のため、現在の報告書にコメントやアドバイスをしていることに加え、月に1度のペースで学習サポーターが意見交換をしたり、学習サポートの仕方を学ぶことができるような時間を持つよう計画している。それにより、活動を通しながら、学習サポーター自身が言語能力だけでなく、グローバル人材に不可欠な様々なスキルを身につけさせたいと考えている。

## 4. LMS を活用した Blended e-Learning 授業の導入と実践

e-Learning は2000年頃から着目された概念で、場所や時間を選ばず自由に学習出来る環境を指しており、狭義には、ネットワークを活用して学習する環境を、広義にはICTを活用した学習方法全般を指す(宮地編, 2009)。ICTを活

用した学習には、ソフトウェアやプロジェクトを使った学習方法もあれば、コンピュータやインターネットなどを使ったネットワーク学習方法、WebシステムやモバイルツールなどのLMSを活用した学習方法などが挙げられる。どの学習方法を用いるかによって学習形態も異なってくるが、大きくは①資料とコンテンツを中心に学習する資料基盤学習、②オンライン上で学習者と学習者、または学習者と教師間の相互作用を中心とした相互作用学習、③講義室授業状況でeテクノロジーを活用したICT活用学習の3つに分類できよう。

Blended Learning(BL)とは「相互型学習」や「折衷学習」、また「ハイブリッド型学習」とも呼ば

れ、その根本的定義は「学習形態をブレンドすること、すなわち異なる学習メディアを融合・調合するということ(宮地編, 2009)を意味するが、その目的は学習効果の最適化にある。本取り組みでは、WBT(Web Based Training)でコンテンツを配信したり、対面学習とe-Learningを融合したBlended e-Learning型授業を、平成25年度の後期より「韓国語Ⅱ(1年次)」「韓国語講読Ⅱ(2年次)」「韓国語リスニングⅣ(3年次)」「アカデミック英語Ⅱ(2年次)」「アカデミック英語Ⅳ(3年次)」で試行的に展開している(表3)。図4は、現在展開しているBlended e-Learning型授業モデル例(「韓国語講読Ⅱ(2年次)」)である。

表3. Blended e-Learning(BL)型試用科目(2013年度・後期)

科目名	開講期	授業回数	Blended e-Learning形態	H23年度履修者数	言語領域(4スキル)					言語レベル(目安)
					基礎・全般	話す	聞く	読む	書く	
韓国語Ⅱ	1年・後期	週2回×15回	普通教室(15回)+CALL教室(15回)+LMS(教材提示・課題提出・*相互作用学習(学習記録)など)	16名	◎					A1
韓国語講読Ⅱ	2年・後期	週1回×15回	普通教室(8回)+CALL教室(7回)+LMS(教材提示・課題提出・*相互作用学習(学習記録)など)	5名		○		◎	○	A2
韓国語リスニングⅣ	3年・後期	週1回×15回	CALL教室(15回)+LMS(教材提示・課題提出・*相互作用学習(学習記録)など)	8名		○	◎		○	B1
アカデミック英語Ⅱ	2年・後期	週2回×15回	普通教室(15回)+CALL教室(15回)+LMS(教材提示・課題提出・*相互作用学習(学習記録)など)	12名				○	◎	B1
アカデミック英語Ⅳ	3年・後期	週2回×15回	CALL教室(30回)+LMS(教材提示・課題提出・*相互作用学習(学習記録)など)	12名				○	◎	B2

注1. \*相互作用学習は、学生間の相互作用、学生と教員間の相互作用を通し、学習者の学習動機を向上させることを目的とする。具体的には、「ことばと文化の学びについて」をテーマに、①韓国語(英語は英語に置き換えている)や韓国語の使い方について、気づいたこと・考えたことは何ですか?②文化・社会(韓国の文化やその他の文化)について、驚いたこと・戸惑ったこと・面白いと思ったこと・気づいたことは何ですか?③言語(韓国語)の学び方について気づいたこと・発見したことは何ですか?④同じく韓国語を学んでいる人に伝えたいこと・したいことは何ですか?の4つの項目のそれぞれについて掲示板に意見を書き込ませている。また、それぞれについてお互いの意見のやりとりを通して、情報を共有し、他者の成果から学んだり、自己の内省を促している。

注2. 言語領域(4スキル)の◎は授業で主として重点をおくスキル、○は補完して重点をおくスキルを示す。

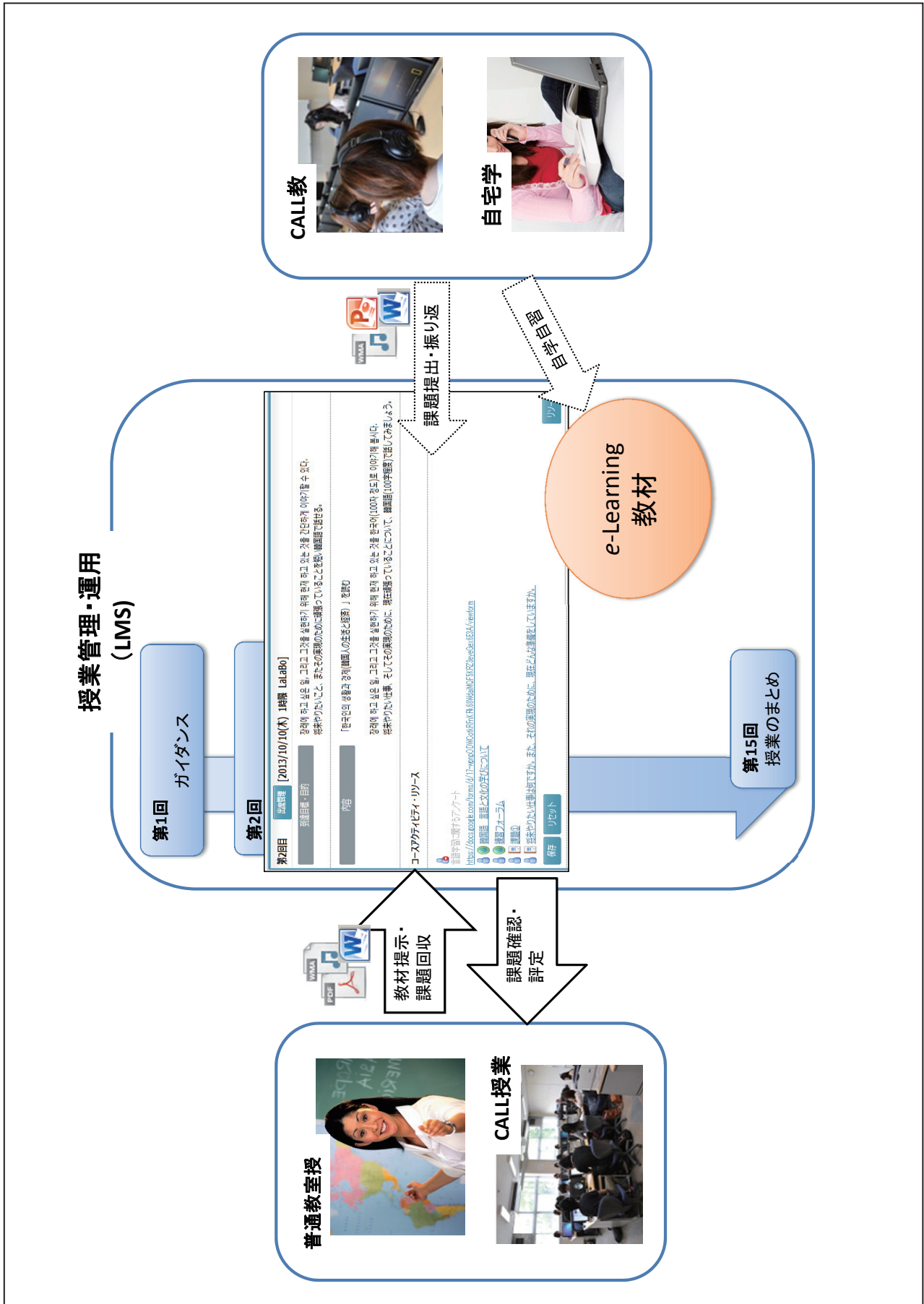


図 4. 山口県立大学の Blended e-Learning 授業モデル例



Blended e-Learning の学習効果および総合的評価は、学期末の授業アンケート結果を待つ必要があるが、学期はじめ（1回目/15回）と学期途中（7回目/15回）に実施したアンケート結果から、コンピュータ学習に対して依然と抵抗がある学生がいるものの全体的に抵抗がなくなっていることや（図5）、e-Learning 教材やLMSの利用が増えている（図6）ことが示された。また、「CALL 教室授業が自分の語学向上に役に立った

と思うか」について、1回目の調査では「非常にそう思う」が30%であったのに対し、2回目の調査では42.3%と上がっていることから、確実に効果が出ていることがうかがえる（図7）。また、相互学習「ことばと学びについて」は、7割強の学生が言語学習や文化に対する意識の変化や視野の広がりを実感しており、かなり肯定的に判断していることが分かった（図8）。

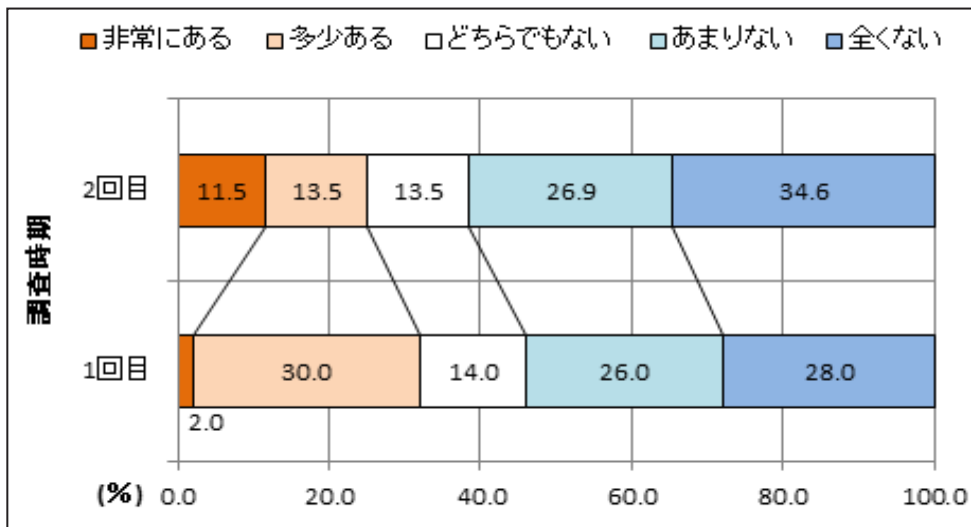


図5. コンピュータ学習への抵抗感  
注. 1回目：n=50, 2回目：n=52

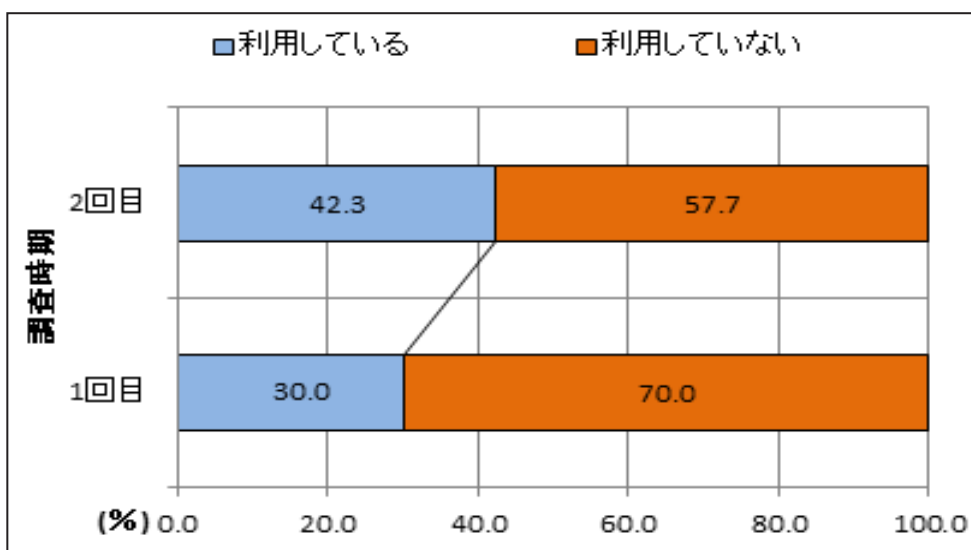


図6. e-Learning 教材や『CaLabo server』(LMS)の利用  
注. 1回目：n=50, 2回目：n=52

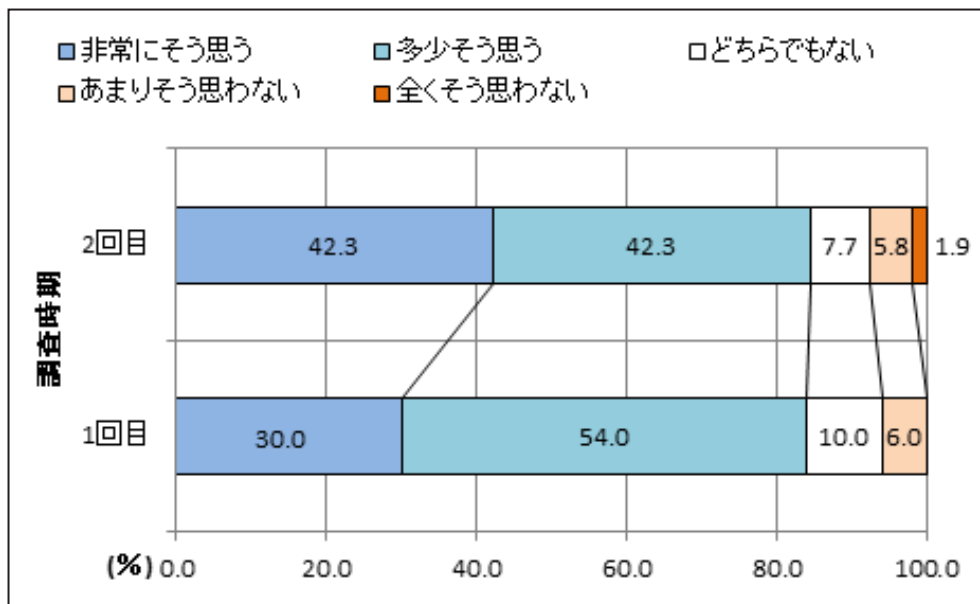


図 7. CALL 授業と学習効果（語学力の向上）

注. 1 回目：n=50, 2 回目：n=52

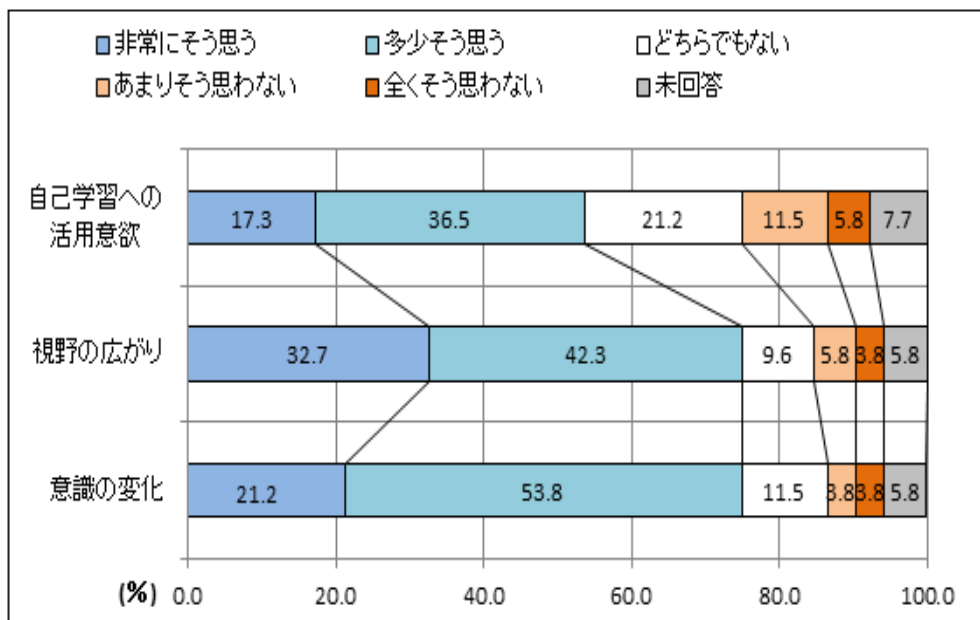


図 8. 相互学習「ことばと文化の学びについて」に対する意識 (n=52)

## 5. 終わりに

本稿では、本学が平成24年度採択された「グローバル人材育成推進事業」の一環として行っている「4技能+*a*」総合的外国語運用能力の育成の取り組みの進捗状況について報告した。平成24年度と平成25年度は環境整備に重点を行ってきたが、本取り組みが最終的に目指すのは発信型の総合的外国語運用能力の育成にある。

今後の課題として、総合的外国語運用能力の育成には、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能に、異文化理解と自己のアイデンティティ意識を含んだコミュニケーション力としての「異文化コミュニケーション能力」の技能が必要であるが、市販の教材を含め、それに適した教材が乏しいのが現状である。そこで、総合的外国語運用能力が育成するための本学独自の教材開発に向けて、本格的な検討を行っていきたい。

また、本学ではCALL教室(LaLabo)が1室のみで、使用したい教員や学生にとっては時間割りに制約があることが課題となっている。そこで、Blended e-Learningの学習効果もさることながら、CALL教室の混雑緩和策としても、次年度からは普通教室におけるモバイル機器を活用したBlended e-Learningの可能性も視野に入れ、外国語教育場での試行を始める。また、

双方向の情報発信の場としてのLMS活用の幅を広げていながら、学生の外国語学習サイクル(学習→復習→確認)定着をサポートする。さらに、教育現場の教員の実効性を考慮し、最大限の学習効果を実現するためにはどのようなブレンドがより有効であるか、引き続きCALL教室、普通教室でのBlended e-Learningの効果を実証的に考察しながら、教材や課題開発にも力を入れていきたいと考えている。

## 引用文献

宮地功偏(2009)『e-ラーニングからブレンドディッドラーニングへ』共立出版,東京

### 1) 林 炫情(いむ ひょんじょん)

専門:社会言語学、語用論、外国語教育  
所属:山口県立大学国際文化学部 教授  
[hylim@yamaguchi-pu.ac.jp](mailto:hylim@yamaguchi-pu.ac.jp)

### 2) 森原 彩(もりはら あや):

専門:外国語教育  
所属:山口県立大学グローバル人材育成推進事業 言語演習コーディネーター(助教)  
[amorihara@yamaguchi-pu.ac.jp](mailto:amorihara@yamaguchi-pu.ac.jp)

*Abstract*

**Aiming to Cultivate High Level Foreign Language and Intercultural Communication Skills,  
“Four-Skills +  $\alpha$ ”  
-Foreign Language Education Program in the Faculty of Intercultural Studies  
at Yamaguchi Prefectural University-**

LIM, Hyunjung MORIHARA, Aya

In 2012, the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University was selected for a funded project, “The Project for Promotion of Global Human Resource Development” by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Our ideal Global Human Resource is “Inter-local Human Resource” who is able to link people and communities world-wide to solve the challenges they face. In order to develop “Inter-local Human Resource”, Yamaguchi Prefectural University has created four main features, 1) “YPU at Home and Abroad Program”, 2) “Four-Skills +  $\alpha$ ”, 3) “Initial Professional Development-IPD Point System”, and 4) “YPU Future Consortium”.

This paper introduces, one of the main features above, the foreign language education program in the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University, which aims to develop high level foreign language proficiency and intercultural communication skills, “Four-Skills +  $\alpha$ ”. It will also report on the progress in the usage and effectiveness of CALL and Blended e-learning in the Korean and English classes. From the surveys answered by the students who are in those classes, 70% of students have positive feelings about CALL and Blended e-learning. The surveys were conducted two times, at the beginning and in the middle of the term, and will be conducted at the end of the term. For the further research, the results of three surveys will be analyzed to find out students’ perspectives about CALL and Blended e-learning and how they

have changed over the term.

Reflecting the experience of incorporating CALL into our foreign language classes for approximately one academic year, there are two considerations for the future. First, it is essential to create our own learning materials in order to improve students’ higher level foreign language proficiency and intercultural communication skills, “Four-Skills +  $\alpha$ ”, because there are not appropriate learning materials. Second, since the university has only one CALL classroom, when one class is held in the CALL classroom, other classes need to be in the regular classrooms and students are not able to use the CALL system for their assignments and self-learnings. In order to solve this problem, for the next academic year, more classes will include Blended e-learning systems not only in the CALL classroom, but also in the regular classrooms by using mobile tools, such as iPads. In addition, exploring and using LMS (Learning Management System) more effectively to exchange information between teachers and students is necessary to support students’ self-learnings.

For the next academic year, we would like to continue to investigate the practical and effective way to use Blended e-learning system not only in the CALL Classroom but also in the regular classrooms, and start developing our own learning materials.